ヨハネスブルグにある国内最大の旧黒人居住区であるソウェトには、
まだまだ多くのバラック小屋が残る。

Re public of South Africa

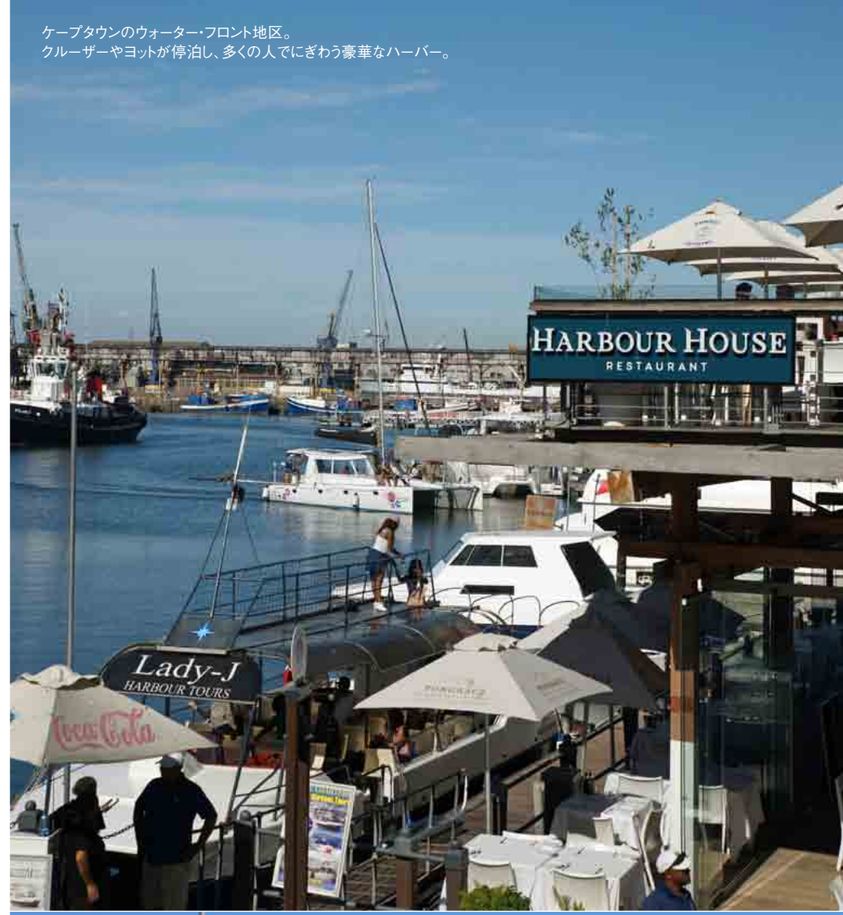
EARTH GALLERY Vol. 127 [南アフリカ共和国]

地球ギャラリー

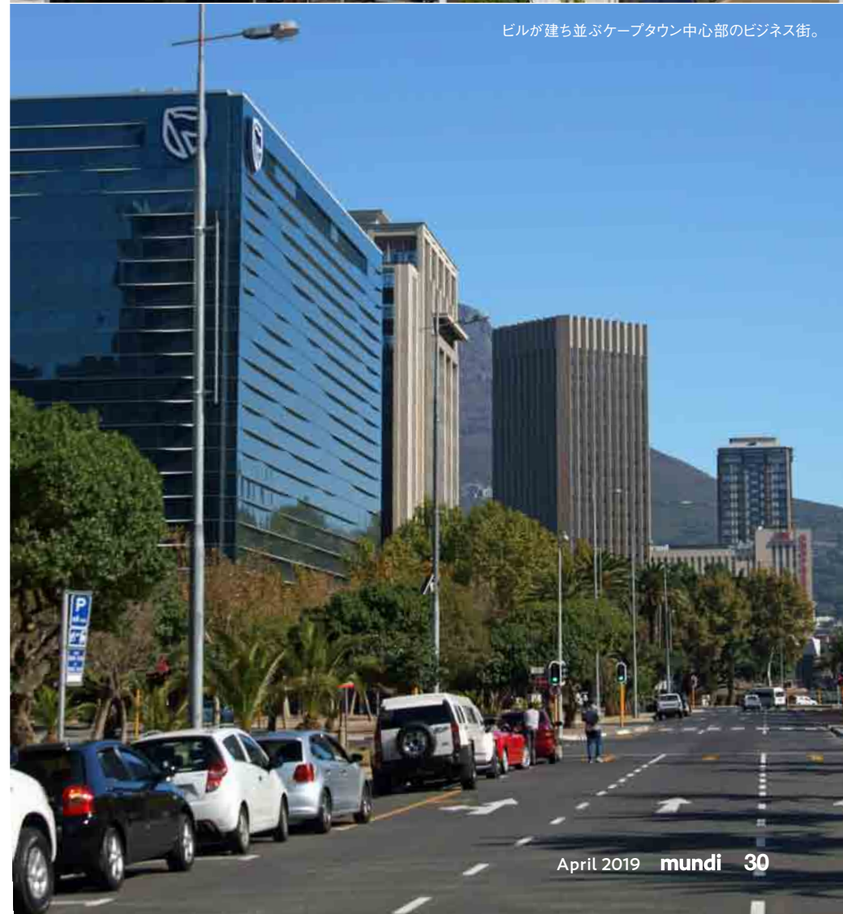
写真・文●木下貴史 フォトグラファー

再起の 現場を歩く

ケープタウンのウォーター・フロント地区。
クルーザーやヨットが停泊し、多くの人でにぎわう豪華なハーバー。



ケープフラッツ地区の古い単身赴任者用のホステル。
老朽化が激しい。



ビルが建ち並ぶケープタウン中心部のビジネス街。

撮影中にやって来た少女は、
新しいアパートの住人。

野外の水場を利用する住民。バラックだけではなく
ホステルでも、水道がないところは多い。

空き缶を利用したバッグ。就労支援のために作られ、
観光客向けの市場での販売やホテルに納品している雑貨の一部。

現在も残るホステルの内部。
6畳弱の部屋を3人でシェアしていた。

イーストロンドンのムダンザーネは国内第2の規模の
旧黒人居住区だが再整備は遅れて、手つかずのままだ。

ネルソン・マンデラ生誕100年に当たる昨年の4月に、私は南アフリカに向かった。マンデラの故郷などを回った後、飛行機で国内第2の都市ケープタウンに降り立つ。市内への一般的なアクセスは、幹線道路のN2号線を走りケープフラッツ地区をなぞるように通るルートだ。ケープフラッツは広大で、旧黒人居住区（一部有色人種も含む）が集まり、訪れた人はバラック小屋の群れがN2号線の脇まで押し寄せている光景に息を呑むだろう。1994年の民主化後も置き去りにされたままの黒人貧困層の実状を目の当たりにしながら、ビジネスビルが林立し、さらにはクルーザーが停泊し、高級ホテルの連なる豪勢なハーバーさえ持つ市内へ入る――N2号線は、南アの過酷な現実である貧富の差が胸に突き刺さる衝撃のルートだ。

今回、4年ぶりにN2号線を走った。すると確かにバラック小屋は目立つけれど、スラムの規模が狭くなっているような気がした。4年前はケープフラッツをゆっくりと回ったので、困窮と赤貧にあえぐ生活を続ける地区の衝撃が大きく、記憶に過大に刷り込まれていたのかと思った。

けれど、記憶違いではなかった。現在、政府や西ケープ州、ケープタウン市が「N2ゲートウェイ・ハウジング・プロジェクト」というケープフラッツ再整備事業を本格化させている。スラムの撤去が進んでいたのだ。バラック小屋や単身出稼ぎ労働者用の老朽化したホステルを取り壊し、2階建ての小ぶりなアパートが続々と建設され、住民はそのあいだ郊外に用意された平屋の住宅に移っているという。4年前は路地を曲がれば砂利道で、やたらと木片や廃材が道端に積まれていたのが不思議で、訊くと、薪に使うからと説明を受けたが、今回は地区内の道もかなり舗装されていた。

「空港と市内をつなぐこの道を外国人が通れば肝を冷やす。本当は2010年のワールドカップまでに終わらせたかったのさ」とガイドは述べた。当時世界各国からサッカー観戦に訪れ、N2号線を通った人は動揺したはずだ。スラムの存在から目をそらしてW杯開催かと外国人の声が溢れたら、政府は旗色が悪い。

ところが住民は、再整備を手放しで喜んでいるわけでない。新アパートの家賃だ。老朽化したホステルなら月額40ランド（約400円）で住めるが、新アパートはその10倍以上だという。生活してゆくにはガス代（プロパン）や電気代（プリペイド制）もかかる。オンボロなホステルに住み続けて家賃を抑え、光熱費に回した方がマシなのだ。ホステルやバラック小屋の建て替えには住民の同意が必要で、貧困層にとっては高嶺の花だからすんなりと同意は難しい。

アパルトヘイトの負の資産といえる旧黒人居住区。かつての白人政権は黒人を低賃金で働かせ、しかも市内への居住を許さず、郊外に〝隔離〟し、住環境の充実などほったらかしに近かった。ケープフラッツにもトタン板で囲っただけのバラック小屋がひしめき合っている地区がいまだに残る。N2号線沿いを優先して再整備する手法に納得しない住民も多いと聞いた。外国人に配慮してショーウィンドーから不都合を取り除きたいだけで、目が届かないところは後回し。ケープフラッツには悲惨な地区がまだ散らばっていて、規模としては最大のヨハネスブルグのソウェトや、続くイーストロンドンのムダンザーネなど国内の他の旧黒人居住区も似たり寄ったりだ。

劣悪な住環境からの再起を掲げる「N2ゲートウェイ・ハウジング・プロジェクト」は、マンデラの悲願でもある。アパルトヘイトで辛酸をなめた黒人たちの待望の、幸福の第一歩である。けれども、快適なアパートを建設すればすむというだけの話ではなく、所得水準の向上も欠かせない。人種間や黒人間の貧富の差は看過できない。

ケープフラッツを訪れた日はあいにくと空は重たい雲に覆われ、やがて小雨が降り始めた。まだ残るバラック小屋は雨漏りを防げるのだろうか。激しい雨にならないことを願った。

木下貴史（きのした・たかし）
神奈川県横浜市在住。東海大学文学部卒業。アフリカ取材に力を入れ、1か月歩き回ったカメルーンをはじめ、訪れた国は13か国。ネルソン・マンデラの足跡をたどるため、南アフリカには7度訪れている。昨年末には横浜市国際局のイベントで、マンデラの軌跡を紹介する写真展を開催し、好評を博した。Facebook検索「木下貴史」。

国内各地にスラムが残る一方で、ケープタウンのテーブルマウンテン（右）や喜望峰（中央）、野生ペンギンが生息するサイモンズタウンのボルダーズ・ビーチ（左）などには多くの観光客が訪れ、にぎわっている。